

in 東京 ところを表現する“京のおもてなし”

平成23年2月8日



室町時代に確立された礼法の多くは、現代においても社会生活の中で生かすことができます。それは礼法の根底に、相手を大切に思うところが宿っているからでしょう。伝書には「時宜によるべし」という教えがたびたび記されていますが、これは時・場所・状況に応じた自然な振る舞いが大切であるという意味です。例えば、食事の席において、ほとんどの作法を省略しても、お箸の先の汚れだけは最小限に留めておく。なぜなら同席者に不快な思いをさせまいというところ遣いを表現するためです。何を省略し、何をすべきか。京都のおもてなしが魅力的なのは、礼法と同様に、おもてなしをする側とされる側のところとつながっているからではないかと思えます。



オープニングトーク
小笠原 敬承 氏
(小笠原流礼法宗家)

パネルディスカッション

鈴鹿 可奈子 氏

(聖護院ハッ橋総本店取締役)

おもてなしというのは、本質を守りながらもお客様が気持ちよく過ごせるように気配りをする。「型を覚えてそれにはめる」のではなく、相手を思いやる心から生まれてくるのではないのでしょうか。

玉垣 多佳子 氏

(十四春若女将)

「いけず」という言葉がありますが、これは相手を傷つけないように…という独特の文化の中ではなく、京都人は、他人との距離を大切にします。その居心地の良さが京都の魅力でしょう。

西村 舞 氏

(先斗町舁之矢若女将)

花街の世界では、何百年の間受け継がれてきた伝統文化があります。時代が変わっても、京都ならではの慣わしやしきたり、おもてなしを守り続ける“不易”の姿勢を大切にしていきたいと考えています。

村田 晃嗣 氏

(同志社大学法学部教授)

京都のまちには多様な文化や観光、おもてなしのブランド力が集積しています。今、日本経済は元気がありますが、京都のパワーをもう一度発信することで、日本の活力は高まっていくのではないのでしょうか。

村田 紫帆 氏

(菊乃井若女将)

若い方や外国の方にも楽しんでもらえるよう、うちでは掘りごたつ式のお部屋を用意しています。すべてとは言えませんが、時代や要望にできる限り応じたおもてなしを心がけたいと思います。

山本 千里 氏

(JTB 西日本京都観光事業開発室)

次世代端末を活用して、情報を発信する取り組みを行っている観光スポットもあります。京都という土地柄、大量生産的なサービスの追求だけではなく、先人から受け継いでいるおもてなしの心を大切にしながら、新たな魅力を掘り起こしたいですね。

in 京都 想像から生まれる創造

平成22年9月2日

京都創造者大賞 2010〈授賞式記念講演〉 瀬戸内 寂聴 氏

人はなぜ生きるのでしょうか？ それは、誰かを幸せにするためです。例えば、母親は愛する子どものために料理を作ったり、衣服を繕ったりしますね。ほかの誰かのために何かを創造するというのは、人間だけにしかできないことです。私は88歳を迎えた今も、小説やオペラの台本を書き続けていますが、その作品に触れた人が喜びを感じてくれる、感動してくれることが、何よりの生きがいにつながっています。京都にはよそにない貴重な古典の文化がたくさん残っていますが、「自分が作ったものが他人の幸せになる！」という創造の文化を、これからも大切にはぐくんでいってほしいと思います。



京都ブランドフォーラム 2010

京都の魅力を全国に発信

京都ブランド推進連絡協議会(京都府・京都市・本所)では、京都のまちが培ってきた伝統・文化の魅力を発信するため、全国の主要都市において「京都ブランドフォーラム」を開催している。今回は、京都と金沢、東京で都市のブランド力や京都のおもてなしの心について、匠の世界で活躍する第一人者や次代を担う“京女”をゲストに迎えて意見交換が行われた。

in 金沢 新たな都市ブランドの創造

平成22年10月27日



大樋 年雄 氏
(陶芸家/金沢大学客員教授)

「個人力」の活用で都市ブランド向上

都市の総合力というのは、いろんなジャンルで活躍する人たちが、これまで誰もやったことのないオンライン・ナンバーワンの取り組みを行っている人たちが集まって、初めて確立されるのではないのでしょうか。「おもてなし」という言葉がありますが、これは相手が期待する以上の付加価値を提供していくこと。私たちは今、金沢漆器や加賀友禅など普段見ることができない工房を訪ね歩く「金沢発クラフト・ツーリズム」を開催し、地域に埋もれた魅力を積極的に発信しています。金沢で暮らす一人ひとりの個人力を生かすことで、まちのブランド力を高めていきたいと考えています。



森田 りえ子 氏
(日本画家)

先達の知恵を受け継ぎ、受け入れる心

私たちは、先達が残してくれた技術やデザイン、決めた事をお手本にし、そこから良いものを吸収することで革新を生み出してきました。よく「伝統は革新の積み重ね」と言われますが、革新だけに目を向けるのではなく、ご先祖様が守ってきたものを現代につなぎ、次の世代へと受け渡していくことが大切です。「受け継ぐ心」と「受け入れる心」のバランスをどのように考えるのか。京都のまちには、伝統工芸に携わる方だけでなく、起業家や学生など多様な人たちが暮らしています。こうした人々が知恵をうまく引き出すことによつて、京都の新たな魅力が形作られるのではないのでしょうか。



清水 六兵衛 氏
(陶芸家/京都造形芸術大学教授)

暮らしの中の感性を価値創出に活かす

革新を生み出すためには、昔から続いてきた一本の道筋を軸にしながらか、時代に合わせた新たな「感性」をプラスしていくことが求められます。私たち京都に暮らす者の周りには古い社寺や町家があふれ、食事のときには京焼・清水焼の陶磁器に触れることができる。感性というのは、人々がそのまちで生活することで自然に身につけていくものではないのでしょうか。東京に行くとき、「京都のブランド力は強い」と言われますが、その評価にあぐらをかくのではなく、他分野とのコラボレーションを含め、常に新しい感性を養い刺激を受けながら、京都の価値を創造していきたいと思っています。



秋本 和美 氏
(フリーアナウンサー)

守る心とチャレンジ精神をばぐくむ

今回のフォーラムを通して、京都と金沢には町並みのほかにも共通する部分がたくさんあることが分かりました。古いものを大切に守りはぐくむ姿勢と、新しいことにチャレンジし続ける精神。この2つをたゆまなく繰り返すことで、まちの魅力が磨かれ、新たなブランドへとつながっていくのでしょうか。